

令和3年度 函館市総合教育会議 会議録

1 日 時	令和3年11月18日(木) 午後1時30分
2 場 所	函館市立戸井学園 図書室
3 出席者	【構成員】 工藤市長, 辻教育長, 藤井委員, 小葉松委員, 須田委員, 神田委員 【事務局】 川村生涯学習部長, 永澤学校教育部長, 吉本生涯学習部次長, 横川教育政策推進室長, 渡邊管理課長, 木村教育政策課長 【発表者】 戸井学園 佐々木校長, 平石教頭, 池田教頭
4 欠席者	なし
5 傍聴者	吉田議員 報道関係者2名
6 次 第	1 開会 2 協議事項 (1) 義務教育9年間の新たな学びのあり方 ア 説明「函館市における小中一貫教育について」 イ 事例紹介「統合後の戸井学園について」(学校説明, 校内視察) ウ 意見交換 (2) その他 3 閉会
1 開会	■横川教育政策推進室長 ただいまから, 令和3年度函館市総合教育会議を開催いたします。 私は, 議事に入るまでの進行役を務めさせていただきます, 教育委員会学校教育部教育政策推進室長の横川でございます。よろしくお願ひいたします。 はじめに, 会議の主催者であります, 市長からごあいさつをいただきます。工藤市長, よろしくお願ひいたします。 ■工藤市長 教育委員の皆様におかれましては, ご多忙の中, 令和3年度函館市総合教育会議にご出席いただき, ありがとうございます。また, 日頃より本市教育行政の推進にご尽力いただき, 厚くお礼申し上げます。 さて, 昨年, 本会議を開催してから1年が経過しましたが, この間, 日本全体が新型コロナウイルス感染症対策に奔走してきました。特に, ワクチン接種に関しましては, 高齢者から始まり, 段階的に接種を進めてまいりましたが, 本市では, 学校関係者など, 子どもに関わる職に就いている方には, 先行して接種を行うなど, 学校現場における感染予防に力を入れてきたところです。現在は, 12歳以上の市民の8割以上が2回の接種を終えている状況であり, 今後, 3回目のワクチン接種が予定されておりますので, 円滑な実施に向けて, 準備を進めているところです。 そういう中で, 10月以降, 感染者が激減し, 非常に少ない状況です。北海道もそれなり

に人数が出ておりますが、全国的にも非常に減りまして、平穏な日常生活を取り戻しつつありますが、年末年始にかけて第6波の発生が懸念されているところであります。今後も子どもたちをはじめ、市民一人ひとりの大切な命を守るため、感染が広がらないよう、力を尽くしてまいりたいと考えております。コロナ禍におきまして、学校では感染予防対策に、大変ご苦勞されてきたことと思っております。これまでとは異なる授業スタイルや生活様式、そして、日々の消毒の作業、さらには、保護者や子どもたちの不安への対応など、教職員の皆さん一人ひとりが、創意工夫して尽力されてきたと聞いております。本市の学校現場において、大きな混乱なく、教育活動を続けられてきたことは、教職員の皆さんのご尽力のおかげであらうと感謝を申し上げたいと思っております。

また昨年度から児童全員に1台ずつパソコンを導入いたしまして、各学校において工夫を凝らしながら活用いただいているところでありますが、併せて、今後想定されるコロナ禍での緊急事態に備えて、持ち帰りに向けた準備も進めていくというふうに聞いております。困難な状況下においても、すべての子どもたちが取り残されることのないよう、学習機会の保障と学びの充実に向けて、皆様と力を合わせて取り組んでまいりたいと考えております。

本日は、4月に本市初の義務教育学校として開校した戸井学園の施設、そして授業の様子を参観させていただくとともに、「義務教育9年間の新たな学びのあり方」をテーマに、本市のこれからの教育についての意見交換を行ってまいりたいと考えているところであります。委員の皆さんにはぜひ忌憚のないご意見をいただきますようよろしくお願い申し上げます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

■横川教育政策推進室長

ありがとうございます。それでは、2の協議事項に入らせていただきます。「函館市総合教育会議の運営に関する要綱」第3条の規定に基づきまして、会議の進行を、市長にお願いしたいと思います。市長、よろしくお願いいたします。

2 協議事項

■工藤市長

それでは、次第に沿って議事を進めます。協議事項の(1)「義務教育9年間の新たな学びのあり方」について、説明してください。

■永澤学校教育部長

それでは初めに、函館市における小中一貫教育について説明いたします。前方のスライドまたは手元の資料をご覧ください。まず、なぜ小中一貫教育が求められているかについて簡単に触れさせていただきます。

初めに、学習指導要領の改訂についてですが、小学校は昨年度から、中学校は今年度から全面実施になっております。新しい学習指導要領におきまして、小学校は幼児教育を土台として、中学校は小学校教育を土台として、義務教育9年間を通して、必要な資質能力を育むことの重要性が、これまで以上に示されたところであります。この背景にあるものとしたしましては、小学校6年、中学校3年といういわゆる6-3の硬直的な区切りへの疑問、子どもたちの思春期の早期化や興味関心の多様化などによる「発達の早期化」、いじめ、不登校の急増や、学校あるいは勉強が好きである生徒の激減などによる「中1ギャップ」への対応、少子化、核家族化やひとり親世帯や共働き世帯の増加、学校の小規模化などによる「学校に対する社会性を育成する機能の要請」、貧困や虐待などの家庭環境で育つ児童生徒の増加、特別な支援が必要な児童生徒の増加などによる「学校現場の課題の多様性・複雑化」などが挙げられます。

そのため、小学校教員には「中学校卒業時の子どもの姿をイメージして教育活動を行うこと」中学校教員には「子どもたちが小学校で何を学んで、何につまずいているかを知った上で指導を行うこと」が一層必要になっております。しかし、簡単に小中の接続と言いましても、小学校と中学校には指導すべき内容が違うということのほか、様々な違いがあります。例えば、小学校の学級担任制と中学校の教科担任制という指導体制の違い、小学校の日

常生活に根ざした比較的きめ細かい指導と、中学校の比較的抽象度の高い内容を含めた指導という「指導方法の違い」、宿題中心で教科間の調整がなされやすい小学校と、宿題の教科間での調整がなされにくい傾向にある中学校の「家庭学習の違い」、定期テストの実施の有無などの「評価方法の違い」、中学校におけるいわゆる校則をはじめ、規則に基づいた指導などの「生徒指導の手法の違い」や、さらには「部活動の有無」などの違いがあります。このような違いを認識した上で、小学校と中学校が目指す子ども像を共有し、取組を進めること、つまり、義務教育修了時の15歳の姿に責任を持つことが、一層必要となってきております。

例えば、亀田中学校区の例ですが、中学校区内で学校の教育目標を共有するなどして、横のつながりを強化しております。また、小学校と中学校の9年間の連続性を整理し、縦のつながりの強化も図るようにはしています。このように横と縦のつながりを強化し、15歳の姿に責任を持って教育活動を進めるために、函館市では、平成30年度から、すべての中学校区において、小中一貫教育を推進しております。

各学校での具体的な取組をいくつか紹介いたします。例えば、青柳中学校区では小中の目指す子ども像を「自ら進んで学び、豊かな人間性溢れるたくましい子ども」として共通理解を図る、そういう取組を行っております。また、発達の段階による区切りを左側の縦のところにありますが、「基礎期・定着期・充実期・発展期」の4つに区切り、指導に生かすようにしております。また巴中学校では、6月に小中のブロック会議、9月に小学生の中学校への乗り入れ授業、10月に小中の授業交流、ブロック研修などを位置づけ、年間のスケジュールとして計画的に取組を進めています。戸倉中学校区では、小中で共通の指導事項を決めて取組を進めています。また、あいさつをすることや、時間を守ることなど、学年ごとの取組を具体化し、子どもたちに分かりやすく示しています。例えば時間を守るでは、小学校1・2年生は、「時計をみて、時間に間に合うように行動します。」、3・4・5年生は、「5分前行動に気をつけて、行動します。」など、具体の姿を示しています。五稜郭中学校区では小中合同で交流分科会、規律分科会など、いろいろな分科会を設置し、具体の取組について、定期的に集合し、話し合いを行っております。そのほか北中学校区では、小学校の教科担任制や中学校教員による乗り入れ指導の工夫、中1ギャップを含む不登校への対応、学習規律の確立や、家庭学習習慣の定着、学校行事などを活用した児童・生徒の交流などに取り組んでいます。

また、関連いたしまして、函館市では令和元年度からすべての小・中学校にコミュニティ・スクールを導入し、小中一貫教育と共に取組を進めています。コミュニティ・スクールの導入により、小中のつながりだけではなく、学校を中心とした、地域と一体となった取組が進められています。この写真はえさん小学校の例ですが、地域の方も含め、子どもたちのためにどのような取組を行っていくと良いか、そういう協議をする場を設けております。また地域の方々に学校の活動に対するサポートをいただいたり、交流などを通して学校のことをよく知ってもらったりしています。

終わりになりますが、ただいま、いくつかの学校の取組を紹介させていただきましたが、函館市のすべての学校におきまして、学校や児童生徒の実態、地域の実情に応じてそれぞれ特色ある教育活動が展開されております。市教育委員会といたしましても、小中一貫教育を始め、各学校の教育活動が一層充実するよう、引き続き教育環境の整備、充実を進めてまいりたいと考えております。以上で説明を終わります。

■工藤市長

続きまして戸井学園の佐々木校長先生お願いいたします。

■戸井学園佐々木校長

改めまして、戸井学園校長の佐々木でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。15分程学校説明のお時間をいただいておりますので、冒頭、私の方から、途中からは教頭が写真スライドを使ってご説明をいたしますのでよろしくお願いいたします。スクリー

ンでご説明をいたしますので、手元の資料については後ほどご覧ください。

10月2日に初めての学校祭が行われました。9月いっぱい緊急事態宣言が明けまして、このような形で全校児童生徒、初めて合唱を披露したところです。保護者の皆様からは「感動をありがとう」ですとか、「たくさん不安があったけれども、無事開催できて良かったよ」「学校全体の団結を感じた学校祭でした」というようなメッセージをいただいております。

義務教育学校については、かねてから小中連携が全国的に叫ばれてきたところですが、多くの要望を経て、平成27年の6月の通常国会にて、義務教育学校の設置を可能とする改正の学校教育法が成立いたしました。函館市は平成30年、本戸井地区の統合校を義務教育学校とすることを決定いたしました。義務教育学校というのは、小学校でも中学校でもない学校でございます。1人の校長のもと、1つの教職員組織ということで、今まで小学校は6年生まで、中学校は3年生までということでしたが、その区切りを柔軟に設定できることから、本校は4-3-2というステージ制をとらせていただきました。

中学校3年生を中3とは呼ばずに、9年生と呼ぶこととなります。未来社会の創り手として新たな価値を見出していく子どもたちを育てたいということで、校訓を「未来を創る」と決めました。さらには教育目標「知・徳・体・意」ということで、戸井の子どもたちの理想の姿をここに確認させていただいております。

1年生から4年生までをジュニアステージ、そして5・6・7年生をミドルステージ、8・9年生をシニアステージというふうに区切りをつけました。小学校、中学校という呼び方をせず、必要なときには6年生までを前期課程、そして、7・8・9年生のことを後期課程と呼びます。義務教育学校では小中の接続にあたるこのミドルステージの運用が最も難しいと言われております。少し細かいので、後でお手元の資料を見ていただきたいのですが、ステージごとの学校教育目標別の目指す姿を掲げた表でございます。校歌については辻教育長に作っていただきました。6月1日の開校式の折には、教育長自ら、子どもたちに校歌を作ったときの気持ちを聞かせてくださいます。子どもたちはその言葉に応える形で、一生懸命、校歌を合唱することができました。さらには、校章のデザインですけれども、「世界の海」「4つの統合した学校」、そして真ん中に、頭文字の「T」をあしらった戸井の郷土愛を表現した素敵な校章のデザインをいただいております。

本年度は全校生徒72名です。特別支援学級を3学級設置しております。3・4年生は複式学級となっております。教育環境ですが、目の前に海、そして校舎の裏手には山・緑があって、本当に素敵な戸井地区です。今までの潮光中学校の校舎に、昨年度、戸井学園のために増築をしてくださいます。素晴らしい校舎が完成いたしました。さらには、今年度、駐車場並びにグランド等外構の整備をしてくださいます。子どもたちは大変喜んで、学校生活を進めております。ちょっと見えづらいですが、本校のすぐ隣には戸井幼稚園がございます。この地域だけで幼小中の連携が力強く進められているところでございます。教職員については、校長1名、教頭2名という形で、全部で約30名のスタッフで運営をしております。校区については戸井地区全域ということで、遠い子どもたちについては、スクールバスで通わせていただいております。スクールバスも、学年によって5時間で終わる日、6時間までの日、そして部活動まで参加する子がいますので、下校時には3便体制で運行しております。

学習面での特色を簡単にお話します。1年生から9年生までの学びをつなぐ授業を教育課程の中に位置づけて、15歳に必要な力を計画的に、しかもスムーズに育てていくよう、学習を進めているところでございます。日課については、ステージや学年によって時間が若干異なります。そうすると時間割がバラバラになりますけれども、給食の終わりの時間を揃えて、そして昼休みにたくさんの子どもたちが一堂に会して遊べたり、清掃は一斉に縦割り、例えば1年生と9年生と一緒に掃除をしたりするような、そういう仕組みを作っております。最も大きな学習面での特色は、前期課程の教科担任制です。小学校の多くは学級担任

がほとんどの授業を受け持つわけですが、本校については、1年生から教科担任制を導入し、6年生ではほとんど中学校と同じような形で、担任は自分の教科しか授業をしないという仕組みになっております。この本校の特色ある教育活動を「TOI STORY」というふうに命名しまして、これも、お手元の資料にあるのですが、たくさんの教育をここにちりばめております。次にGIGAスクール構想です。先ほども部長からもありましたが、教室にパソコンを1人1台配置していただきまして、本当に教育、授業のスタイルが変わりました。後ほど見ていただくことになると思いますけれども、子どもたちは若い感性でどんどん、どんどん使っていけるようになってきました。GIGAスクールのサポーターの派遣をさせていただいておりますので大変助かっております。ありがとうございます。

生活面では本校はチャイムを1日3回しか鳴らさず、あとは時計を見て動くという行動を期待して学校生活をしております。部活動については、4つしか部活動の種類はないですけれども、小学校でいう5年生から参加を可能としております。オールシーズン、5時半には部活動は終了し、そして土日、どちらかは必ず休養するというところで、働き方改革も進めているところでございます。生活の決まりについてですが、今、全国的にブラック校則ということが問題になっているところですが、本校については逆の方向で設定しております。子どもたちが自分で判断する力をつけ、そして子どもたちが納得できるということで進めております。例えば、これは体育館を使うときの決まりです。小さい頃は安全性のこともありますので、ある程度ルールをしっかりと身につける必要があります。怪我をしないとかそういうことも含めて、しっかりと教え込むのですが、だんだん文言は減らしていきまして、既習事項を応用して、自分たちで判断できるようにと考えています。戸井学園では生徒会宣言を子どもたちが自ら採択をしました。この3つの宣言に向かって子どもたちは、プライドを持って生活をしていきます。もし決まり等で文字になってない隙間でいろいろな判断が求められたときにはこの宣言に立ち返って、これを拠り所にして、自分たちの生活を見直していく、そういう約束になっております。本校では、毎日が楽しみな学校づくりということで、このような形で学校経営しております。義務教育学校のいいところはやはり上の学年、上のステージに憧れを持って、子どもたちが成長して、下の学年の子たちをしっかりと面倒をみてあげる。そういう、まるで家族のような繋がりが魅力だと思っております。そういうことで、函館市の未来社会の創り手として頑張っていける児童生徒を育て、ちょうど8ヶ月経ちました。

■戸井学園平石教頭

教頭の平石です。よろしく申し上げます。開校の年の3分の2が過ぎました。これまでの教育活動の様子を紹介します。

まずは入学式です。この光景は今年だけの光景です。なぜかという、7年生の入学式があったからです。これは新1年生のみの入学式になります。今年度は教育長にも出席していただき、初めて全校で歌う校歌を聞いていただきました。運動会は種目も考慮しながら行いました。全校よさこいでは後期課程の生徒が前期課程の児童に教えるなど、縦のつながりを意識した活動を行いました。前日までの雨で開催が危ぶまれましたが、第1回目の運動会を開催することができました。また、事前をお願いしていなかったのですが、保護者、地域の方も積極的に協力してくださいました。盛大に開校式を行いたかったのですが、コロナウイルス感染症により保護者の不参加で閉校式のときよりも参加人数が少ない式になりました。こちらは校歌を作成してくださった教育長と校章を作成してくださった須賀先生にお礼のメッセージをお渡ししているところです。子どもたちの校歌がさらにパワーアップされ、感動的な式になりました。学校祭は1から9年生が縦割りでグループを作り、発表する劇等を作りました。9年生が中心となり、学校祭を運営しました。学校祭の名前も戸井の清々しいさまを表す、清潔の清という字と、宝物という意味の王辺に朱色の朱と書く珠から清珠祭となりました。9年生が考えました。今後、代々この名前を使用する予定です。

さて、本校の目玉の一つである縦割り活動の日常を紹介します。まず、清掃です。高学年

の子どもたちが低学年の子どもたちに清掃の仕方を教えたり、一緒に協力しながら清掃を行ったりする子はとても微笑ましいです。清掃場所は2ヶ月に1度変わります。9年生もとても優しい表情で接してくれています。先日は、9年生が企画した集会在全校で行われました。鬼ごっこなどのゲームを通じて団結力を強めていました。この場面は全校集会になりますが、ステージごとに七夕集会や読書集会等を実施しています。ステージ長の学年がリーダーシップをとり、各集会を盛り上げています。3から7年生では月1回程度のクラブ活動があります。本校では前期課程の児童だけではなく、ミドルステージのリーダーとして後期課程である7年生にもクラブを設定しています。ステージリーダーとしてリーダーシップの育成に努めています。また、先ほどの校長の話にもありましたが、部活動には5年生以上が参加しております。5・6年生は週2回の活動になりますが、どの子も楽しみにしています。生徒会活動も、4年生から行っています。なぜ4年生からかというと、ジュニアステージのリーダーだからです。生徒会で決まったことをジュニアステージの子に伝えるステージのリーダー長として責任を持たせるという意図があります。

次に、学校のコロナウイルス感染症対策ですが、毎朝、用務員さんやスクールサポートスタッフが、職員室や子どもたちがよく触るドアノブやケーブルなどを消毒してくれます。また、コロナウイルス感染症対策の一つとして、スクールサポートスタッフと同様に配置されました学習指導員も、子どもたちへきめ細かな指導をしております。心が不安定な子どもたちに寄り添ってくださる指導員に大変助かっております。また給食だけではなく、見学旅行や宿泊研修などでも黙食を徹底して行っております。他の学校と同様に、日常の手洗い・消毒はもちろんのこと、各教科での活動も、ただ単に取りやめるのではなく、どうしたら子どもたちに活動させられるか、工夫しながら取り組んでおります。

次は外部との連携です。本校は、特色ある教育活動を「TOI STORY」と名付け、「TOI STORY」の中では「戸井を学ぶ」をコンセプトにキャリア教育をしています。様々な体験を子どもたちにさせようと指導計画を組んでおります。それぞれの教育活動には外部講師の活用や外部の見学を多くし、実際に子どもたちが本物に触れ合う機会を多くしています。長期休業期間中は、プログラミングと英語教育に特化して学べるように、外部人材を活用しながら学習会を行っています。夏休みには、プログラミングの基礎を学び、子どもたちは自分で作成したキャラクターに指示を出しながらゲームを作る基礎を学ぶプログラミング教室と、English キャンプとして北海道国際交流センターの職員の方や、ALTを講師に招き、最終日に英語でコンサートを行いました。それから、本校はスクールバスがあるため、いろいろなところに出かけることは、他の学校に比べて優遇されています。その利点を生かして教育活動を実施しています。これは職業体験に7年生が行った時の写真です。また、地域の方にゲストティーチャーに来ていただいたり、地域の施設を活用したりしています。これまではコロナウイルス感染症のため、外部人材の活用や様々な施設の利用も慎重にしておりましたが、緊急事態宣言が終了した今は、外部人材の活用をさらに推進する予定です。先日性教育の講師に湯の川女性クリニックの大釜助産師に来校いただきました。また、3・4年生に生け花を教えていただくために、池坊の野呂先生に来ていただいたりもしました。生け花は戸井教育事務所主催の戸井地区文化祭に出展しました。今後も体育の柔道や、相撲などで外部の人材を活用する予定です。

最後に、地域との連携です。外部人材として教育活動に地域人材を活用するだけではなく、この地域の唯一の学校になったということで、地域との連携もこれまで以上に密にする必要があると考えています。そこで重要なのが学校運営協議会、CS会議です。先日行われた会議では、戸井幼稚園・戸井学園の取組と、子どもの取組を委員の方にお示しし、家庭・地域の取組を一緒に考えていただきました。「学校でこんなことをしているなら、こういうお手伝いできるよ」や「こういう人なら町会で派遣できるよ」など、子どもたちの活動や学校を応援してくださる応援団がたくさんいらっしゃる事が分かり、改めて嬉しく思っているところです。特に今年度は隣接している幼稚園とも、今まで以上に連携を図り、幼稚園の

参観日に本校の先生方が数名参観に行ったり、逆に幼稚園の先生が本校の参加日に来てくださったりしています。

また、学校図書館も学校司書を配置していただいたおかげで整理が進みました。11月の参観日には保護者にも開放して、本の貸し出しを行いました。今後、幼稚園にも開放し、園児が学校の本を読みに来たり、読み聞かせのときに一緒に聞いたりする活動を予定しています。以上です。

■工藤市長

どうもありがとうございます。ただいま事務局と戸井学園から説明がありました。この後は戸井学園の見学になります。

——戸井学園視察——

■工藤市長

ただいま、戸井学園の見学を行いました。また、先ほど、戸井学園の取組についての説明もありましたが、見学の感想も含めて、どなたか感想などいただけますでしょうか。

■小葉松委員

質問でもいいですか。

■工藤市長

どうぞ。

■小葉松委員

一番気になるのがやはり中1ギャップというのがどのくらい解消されるのか。まだ今年1年目なので、現場の先生方にもその統計的なものは分からないと思いますが、今年始めてみた印象として、中学1年生に相当する7年生はどうでしょうか。普通に今まで中学校に入学したのと比較して、子どもたちの様子で何か変わったなと思う点があったらぜひ伺いたいなと思いますのでお願いいたします。

■戸井学園佐々木校長

先ほどスライドにも入れましたが、まず学習面では、7年生である中学校に入るとすぐ勉強が定期テストに追われる雰囲気になりますが、本校はそれをあえて廃止しまして、7年生も小学校のような単元テストを行い、短いスパンで指導と評価を繰り返すことによって、子どもたちをしっかりと見て落ちているところをすぐ引き上げてあげる、そういうシステムをとっています。ただその成果については、今後どのように変化していくかを、1年間様子を見て、また次年度考えてみようと思っています。7年生になって対外的なことがあるので、制服だけはしっかりと身に着けさせてますけれども、6年生が小学校のリーダーだったところを本校ではミドルステージのリーダーを7年生にお願いしているので、その辺でモチベーションを保ちながら、上のステップとも連携をして、憧れを持ちながら生活できるようにしております。制度としては、中1ギャップ解消について本当に意味があるのではないかと感じております。

■小葉松委員

ありがとうございます。

■工藤市長

私からも関連して、我々の時代は小学校と中学校へ、がらりと授業のあり方が変わりました。小学校の場合は一人の担任の先生が全教科を受け持つが、中学校に行くと、専門の科目ごとに先生が別れる。ここではどのようになっているのでしょうか。

■戸井学園佐々木校長

小学校1年生から図工と音楽、これをまず教科担任を入れて、担任の先生はその授業は持たないでおります。3年生になると理科、そして外国語というふうにして、だんだん増えていきます。小学校、いわゆる前期課程にこれだけ教科担任制を導入している学校は道内でも

珍しいのではないかと思います。

■工藤市長

小学校の早いうちから専門の教科の先生に教わっているということですね。

■戸井学園佐々木校長

そうです。

■工藤市長

今、小学校と中学校が別々の場合は、小学校であれば、我々の時代と同じように、専門性が必要な音楽とかは別にして、主要な科目は一人の先生が教えてるという状況ですか。

■戸井学園佐々木校長

そのような学校がほとんどだと思います。資料をご覧ください。この青く塗られているところが、全部教科担任が持っているところです。

■工藤市長

6年生ぐらいになるともうほとんど中学校並みになるのですね。

■戸井学園佐々木校長

そうですね。その場合、理科では、今まで中学校しか教えたことのない先生が、小学校3年生を教えておられますが、こんなに小学校の授業は、解説もゆっくりと丁寧にして教えるのだということを初めて知ったと聞いております。ですから、やはり小学校と中学校では教科書の質も含めて、やはりスピードが違いますので、そこが中学校入学後の負担になっているのではないかと感じました。

■藤井委員

先生方のギャップというのはどうでしょうか。私はずっと中学校の教員で、南茅部の磨光小に初めて行ったときに、生徒指導の時、言葉が子どもに伝わらないことなど、ずいぶん苦労したことがありました。また、小学校の先生が中学生に教える、中学校の先生が小学生に教える場合に、先生方のギャップはなかったのかお聞きしたいです。

■戸井学園佐々木校長

実は私自身が中学校で教えた経験しかないのですが、今では1年生とか2年生の教室に行くのが楽しみです。

■藤井委員

いいですね。

■戸井学園佐々木校長

半年経ちますが、言葉使いなど慣れてきます。例えば集会で、1年生から9年生まで全校児童生徒に話をするとき、中学生に伝えていたような話し方だと、小学校1年生には伝わらないのだろうと思ひまして、いったい誰に向かって話しすればいいのかと最初は迷っておりましたが、だんだん慣れてきまして、中学年ぐらいにスポットを当てて話をすることで、あとは担任の先生などにフォローしていただいています。ただやはり初めて小学生に教えるという先生が結構多いので、教材研究など、明日の授業をどうやって進めようかというのは、この1年目、非常に先生方にとっては大きな仕事の一つになっています。ただ、子どもたちの成長をすごく感じ取れているので、先生方は本当に楽しいと言っております。授業を作るのも楽しいですし、成長を見ていくのも楽しみと言っています。

■工藤市長

担任の先生はいるわけでしょう。

■戸井学園佐々木校長

おります。

■工藤市長

中学校の教員で小学校の授業もやることあるのか。あるいは小学校の教員が中学校の授業をやることもあるのか教えてください。

■戸井学園佐々木校長

義務教育学校は、基本的に両方の免許を持っている教員が、配属されておりますが、現在は、過渡期にあり、日も浅いために、まだ片方の免許でも当面の間は大丈夫ですよという状況だと聞いておりますが、本校については、ほとんどの教員が両方の免許を持っています。

■工藤市長

教育長が配慮してそういう人事になったんですね。

■戸井学園佐々木校長

本当に考えていただき、ありがたいことです。

■工藤市長

わかりました。はい神田委員。

■神田委員

例えば函館市内の学校で縦割りで子どもたちが接するというのは、ある程度はあると思うんですけども、戸井学園の様子を見る限りでは、もっと密着して濃い縦割りなんだというのを感じました。その中でやはり縦割りが濃いことによって子どもたちに出る影響には、どのようなものがあるのかと思いました。教えていただけますか。

■戸井学園佐々木校長

本校の人数は全校児童生徒が100人以下ということで、縦に割ることを何回も繰り返すと、子ども同士がいろいろなところで縦横斜めに関わるということが頻繁に出てきます。これは義務教育学校でも大人数の学校になると、縦割りにしても一部の人にしか関わらない。そういう意味では、本校は、今まで日新小中学校は一つの校区、戸井西小と潮光中は一つの校区、そこをクロスして新しい出会いが生まれておりますし、後期課程の子どもたちが優しくなります。自分にもし妹弟がいなくても、まるで家族のような形で接することができますし、逆に小さな子どもたちにとっても、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいろいろなことを教えてくれる。そういう意味では温かい環境です。中学校に行ったら、おっかない先輩がいるとか、部活動に行ったら、しごかれないかとか、そういう心配は全く起こらないと思います。そういう意味で非常にいい制度だなと思います。

■神田委員

ありがとうございます。

■工藤市長

はい、須田委員。

■須田委員

こういう義務教育学校の1年生から9年生までということで、生徒数も、それに応じて増えていますし、教職員の数も増えるということで、目が行き届くようになるのかなというふうに思って、デメリットよりメリットのほうがたくさんあるのではと思っております。近くに幼稚園もありますし、地域との関係も作れるということで、いいのかなというような感想を持って見てまいりました。今回、この義務教育学校というのが私も初めてなものですから、ちょっと私からも質問をしたいのですが、1年生から9年生まで、どちらかというところ、1クラスがものすごく少ない感じで運営されていて、そうするとクラス替えもない形で1年生から9年生までずっと進んできます。今、お話にあったように非常に皆さん仲良くやられてるというふうには聞いておりますが、逆に言うと、9年生が卒業した後、大海に小さな魚が泳ぎ出る形になろうかと思うのですが、そういった心配に対してどういう配慮をされているのかということ、こういう学校ですと、他の学校からもだいぶ離れて、センターではない環境にありますので、他校との交流とかをどのようにして行っているかお伺いしたい。

■戸井学園佐々木校長

昨年私、潮光中学校の閉校の年におりましたが、全校生徒が13名でした。中3が3名しかいなかったのですが、3名がそれぞれ違う高等学校に進学をしております。卒業生として、保護者もそうですし、本人も学校にたまに来てくれて、いろいろな話を聞きますが、思いのほか、3人しかいないクラスから何百人の高校生活になっても、対応をしっかりして元

気に生活をしてきています。それが更にこのように13名が70数名の学校に保護者の期待も含めて統合していただいて、上下関係とか、横の人数はなかなか増えておりませんが、近接している学年の子どもたちとも仲良くなっていくので、少しは集団性が増すと思います。ただ地域としては、少し離れているので、なんとなく他の学校との交流がないようにも思えるのですが、部活動などでは、いろいろな学校の子と交流しております。実は高等学校にここから自転車で通う子も結構いるぐらいです。湯川地区ぐらいまでだったら平気で自転車通学をしています。そういう意味では、他の学校とも交流している子もおります。ただ、今、委員がおっしゃったように、街場の学校に比べるとやはり交流は少ないと思います。そこに遅れをとらないような社会性を一生懸命身につけるためにいろいろな大人との接し方とかをこちらから仕組んで、学習の中で、それこそ大海を見せるという、そういう学習を積み重ねていかなければならないと思います。これからも10年、20年経つとまた少し人数が減る可能性もあるものですから、そこは私も今後の課題だと思います。

■須田委員

さっきスライドを見させていただいて、いろいろな講師の方に来ていただき、体験学習をさせているという話も聞いて、いろいろな関わりを持たれているとは思いますが、やはり少し同世代の子どもたちとの接点が必要なのではと思います。学校として、そういう交流の場を持っていただければという感想です。1年目の課題としてしっかりやっていただきたいと思います。

■辻教育長

ずっと校長先生がお話しされていますので、教頭先生に聞きます。平石先生が小学校の配置、池田先生が中学校の配置というのは、人事配置上はそうになっておりますが、日常的な業務の役割分担はどのようにされていて、それによる成果など、何かあれば教えていただこうかなと思います。

■戸井学園池田教頭

調査など、小学校と中学校別でくる場合については、お互い分けてやっています。普段はですね、これ、みんなに言っても不思議がられますが、職員室で隣で何をやってるかなってお互いに見ています。阿吽の呼吸で、お互いやってない時、こっちやるから、そっちやってねという感じです。

■教育長

これはこれ、あなたはこれと違って、機械的に分けているわけではないのですね。

■戸井学園池田教頭

一緒にいろいろやっています。

■戸井学園平石教頭

保護者からも、中学校は池田先生いますかとか、小学校の方だと平石教頭先生というふうに、保護者に見られていますが、どちらが聞かれても、同じことを答えられるように常に情報は密にしています。

■教育長

それで運営上、困らないということですね。うまくいっているんですね。

■藤井委員

学校日誌ももちろん一つですね。

■戸井学園池田教頭

はい。

■藤井委員

じゃあ、どちらが書いているのでしょうか。

■戸井学園池田教頭

学校日誌は私です。

■藤井委員

分かりました。

■工藤市長

他には。

■藤井委員

私は亀尾小中学校に勤務した経験があるのですが、あそこは小中併置校でしたし、こういう学園になっても同じような感じなのかな、まあ教科担任制が入ってるのかなと思って、実は来ておりました。そうしたらまるっきり違う。このステージを3つに分けてというのが、実際いろいろなお話を伺い、まるっきり別物なのだと実感しました。もう一つ驚いたのは、ミドルクラスは50分授業を行っている。これは、5・6年生は時間的に大丈夫ですか。

■戸井学園佐々木校長

本来であれば、5・6年生は45分授業というのが通常ですが、一緒のステージで同じ教育活動をするのが多いものですから、あえて50分にしました。そして、5分の余剰時間は余剰としてカウントするのではなく、そこは授業の中で余裕の時間として、各教科でとっているということです。ですから、そこはゆったりと導入したり、ゆったりと授業を終わったりとか、上手にやるという約束のもとで5分間延ばして運用させています。本来は細かく5分多くやってるのを積み重ねて授業時数にするところもあるみたいですが、本校はその方式をとらないで行っておりました。

■小葉松委員

質問ですが、今のこの教科の話とか、4月から運用するに当たって、何年ぐらい構想というか、義務教育学校というものが市内にない中でどんなふうにしていこうとか、どうしたらいいだろうっていろいろな意見とかがあってこういうふうに固まったと思いますが、準備期間は、どなたがどのぐらいの期間かけてやられたのかを伺っていいですか。

■戸井学園佐々木校長

統合準備委員会というのが、30年に義務教育学校を作ると決まったところからスタートしまして、ここにいる池田教頭も東京の義務教育学校の視察にも行かせていただいていますし、前任の校長は道東の方に見に行かれて、義務教育学校とはどういうものだということを学んでいます。そして、この地域に当てはまる、教育課程についてどうしたらいいかというのを2年間かけて研究し、先生方もスタッフに加わって、管理職も加わって、教育委員会の方からもいろいろアドバイスいただきまして、私たちも初めてのことだったものですから、結構楽しみながらも苦労しながらも、開校を待ち望んできました。思ったものはある程度、動いてはいますが、今、やってみたらちょっとこれ来年変えたいねということも出てくるものですから、それについてはスピード感を持って、改善していきたいと思っています。本当に分からない中での手探りの準備があったことは仕方ないと思っています。

■小葉松委員

どうもありがとうございます。

■工藤市長

はい、あとはありませんか。

■教育長

今のお話ですけれど、池田教頭、確か視察のプロセスでは、保護者や地域の方にも一度、他の地域を見てもらったことがありますよね。

■池田教頭

はい。それは私が来るより前ですが。

■教育長

地域の人にも、義務教育学校ってこんなものですよというイメージを持ってもらうために、根室行ってもらったことがあります。改めて私の感想ですけれども、学校におじゃまして子どもたちの姿を見ていると、特に小学校では1年生から6年生まで見ると、人の成長というのはすごいものだなっていうふうに感じている。今日はもう、それにもまして、1年生

から9年生まででこうやって人間というか、子どもは成長していくのだなというのが、本当に手に取るようにわかるというのを非常に興味深く見ました。それから説明の中では、体育館を使うときのルールというのを示していただいておりますが、小さい子どもは、具体的にたくさんルールを決めなければ分からないけれども、だんだん年が上がっていくと、抽象的なルールで分かるようになるというのが非常に象徴的で分かりやすい。発達の段階を示す資料だったなと思って、興味を持って見せていただきました。それで私、この学校の開校のところから、ずっと見ておりましたが、区切りを4-3-2にするというのは、先ほどの他の学校の視察とかも踏まえて、それからいろいろな実践を研究する中で、4-3-2での区切りがいいだろうということで始めているわけですが、実際にやってみてどうなのか。これは別に何も決まりはないはずなので、やってみて駄目だったら、違う区切りにしてみてもいいものだと思うんです。現時点でまだちょっと早いですが、うまくいってるんだろうとは思いますが、その区切り目についてはどういうふうに印象を持っているのか知りたいです。

■戸井学園佐々木校長

義務教育学校をいろいろと見させていただいて、4-3-2という学校が圧倒的に多いですが、中には4-2-3に変えた学校もあります。6年生と7年生がもともと小中の分かれ目なものですから、いろいろな意味でやはりいずいというふうに聞いております。本校はまだ1年目ですが、やはり6年生と7年生の学習面でのスピードの違いや、内容の開き、それから、いわゆる生徒会と児童会の違い、部活動のあるなしなど、そこを柔らかく接続することに非常に意義があると思っております。やはり私は中学校畑ですが、小学校での授業の進め方であったり指導のスタンスであったり、それが中1で入ってきたときに、こうあるべきだという中学校側の指導と少し温度差がやはりありますので、そこがうまく、中1に入ってきた時に6年生が7年生になった時に、本当に次の学年に上がるのが楽しみだという形でいけるのがステージ制の良さかなと思います。ただ、多くの学校では、今まで小6の学校のリーダーであった立場はどうなるんだという議論が結構あったみたいですが、私はあえてこの6年制にリーダーシップというのは取り払っていいのではないかと考えておまして、もう6-3というのはなくなったわけですから、そこは7年生にステージのリーダーとして頑張ってもらって。もう少し歴史が積み上がっていくとさらにそのステージ制の良さに磨きがかかっていくのではないかなというふうに今は感じております。

■須田委員

関連して、そのステージごとで一つの塊みたいな形で考えられているとのことですが、一番下と一番上の、年でいうと9歳離れている。最近では9歳年の離れた兄弟はいないような時代だと思っておりますが、もう9年生からみたら1年生なんかは本当、兄弟というよりはずいぶん小さな子という感じではないかと思っております。関わり方で何かを見つけられるとかそういうようなことはありますか。

■戸井学園佐々木校長

そうですね、私もたまに想像いたしますが、今の1年生が、この学校を卒業する8年、9年後を想像したときに、今の9年生はもういい青年になっていて、今の1年生が、高校生になった頃には、その9年先を今の9年生は生きているわけですから、社会に出たときにも随分、大先輩に当たるということになるだろうなということは想像できます。ある意味、その年齢差は、あまり学生時代には交じり合うことのない年齢差で、この年齢差が関わることの意義を、これから見つけていきたいと思っております。今は一緒に遊んだり勉強したり掃除したりという関わりだけで、この一番上と下のステージのつながりというのを、そんなに意識してやっていないところがあります。9年生が1年生の面倒をみるなどの必然がありますが、それを何か意図的に組み合わせていくということについてはこれから勉強していきたいと思っております。

■工藤市長

はい、他にありませんか。

■神田委員

先ほどの保護者の方も、義務教育学校を見学したというのを伺って、多分、地域の方や保護者の方がそういうものを見学したことによってご理解が深まったのかなというふうに思いました。児童たちを見ていて、地域の方や、先生方、保護者の方に見守られて、温かく見守られて学んでいるんだなというのを本当に実感いたしましたし、統合とか、義務教育学校というのはなかなか、保護者というかPTAの方には耳慣れない、まだちょっとなんだろうなと思ってることが多いと思います。ですから、このような学校はすごくいいモデルというか、見ることで、統合することが例えばちょっといやだなと思われてる保護者の方もたくさんいると思いますが、そういう面だけではなく、子どもたちがまた次のステージに行くことができるメリットになる学びの場ができるんだということをこのモデルが実証しているのかなと感じることができました。今日はすごく勉強になりました。ありがとうございます。

■工藤市長

はい。他にありますか。

■辻教育長

今の件で、実は戸井の学校が統合することは先に決まったんですが、その統合することが決まった時点では義務教育学校にするということはまだ決まってはいませんでした。後になって、私たちもいろいろな情報を地域の方に差し上げて、こういう学校にするという方法もありますよってという提案をしていったという形なんです。だから、最初から義務教育学校を作ろうということが、それが目的だったわけではないんですけど、その良さなどを地域の方や保護者にご理解をいただいて、やってみようかというような経過だったと思います。

■工藤市長

はい。よろしいですか。

■藤井委員

先ほどのステージに戻りますが、うまいこといってるなと思います。さらにうまくいけばいいなと思うのは、よく小学校だと1年生から6年生の中で3・4年生という、だらけるというか、緩む学年であると言われます。中学生だと中学2年生というのがそれに当たりますが、これだと3・4年の4年生が今度はそのステージのトップになりますし、また中学2年生も、そういう意味ではシニアコースの1年目ということもあって、これがうまくいくと、今までいろいろと課題になっていた部分がクリアされるだろうと思っており、是非うまくいけばいいなと思いました。それで縦割り活動というのは清掃や学校行事等で行われていると伺いましたが、何か具体的に特にここの戸井学園としての独創的な縦割りというのはございますか。

■戸井学園佐々木校長

今回初めての学校祭を行いました。中学校の教育課程やそれから学習発表会、学芸会という小学校のものとどうやって組み合わせるのかということから、先生方に議論していただきました。

最終的には、ミックスした形ということで、子どもたちの自分たちのいいところを出す、自由な発想のステージもありながら、小学校で今までやってきた劇みたいなものですか、そういうものを取り入れたいということで、初めて1年生から9年生まで縦割りで劇を3つ作ってやってみました。本当に私たちの想像しないような形の9年生のリーダーシップと、それから1年生から3年生は本当にお兄さんたちが何を話しているのか分からないのですがそれでも一生懸命、それに主人公をそれぞれお互いに、いい主役を立てながら、本当に感動的なものになりました。そういう行事を今は縦に割っていくことで行っていますが、先ほどお話にありましたが、1から9までが縦になることの教育的効果についてどちらがいいのかについては、まだ迷いがあります。例えば、1年生から4年生までを一つの塊にして、その上の学年を縦に割るという方法もありますし、その逆もあると思っております、その辺の

発想を次年度の課題として、今、学校として持っているところです。

■藤井委員

例えば総合的な学習の時間というのは、小学校、中学校にあると思いますが、その地域探検の生活科の時間などで、せっかく縦割りがあるならば、シニアの子どもたちが、案内役とかアドバイザーとかそういう教科にも入った形の縦割りというのを実現するのはどうかとちょっと思ったもので、期待を込めて、そういう話はないかなと思いました。

■戸井学園佐々木校長

隣り合ってる学年は、学び合いをずいぶん進めておりますけれども、今、委員がおっしゃった、案内役など、そういう大胆な学習形態にチャレンジしていきたいというふうに思いましたので、次年度に向けて、先生方と話をしていきたいと思います。

■工藤市長

他に。なければ私が何点かお聞きします。私たちの時代は非常に兄弟が多く、私も実は4人兄弟の長男。下が3歳違い、5歳違い、7歳違いです。同じ学校にいたことは、一番下とはありません。大学に入った頃、まず小学生、あいだが高校生、中学生とかで、そういう中で兄弟が同じご飯食べたり、起きて寝たり生活していました。

今の子どもたちにはそういう経験が少ない。下の面倒をみたという経験がない。私なんか一番下が赤ん坊の時、おんぶしていたという経験があるが、そのような経験もない。そういう中で、9歳差があればね、家庭では経験できない、あるいは他の学校では経験できない、そういう下の面倒をみるのが良い面かなと思います。その一方で、小学校に入学する時や、小学校を卒業して中学校入学だと張りきって行く場合に、入学・卒業して新たなステージに行くというのがありましたけれども、9年間この高揚感がない。メリットとデメリットはいろいろあるのかなと思いますが、私が非常に気になっているのは今年の1年生は入ってきたから、こういう学校だと分かるけれども、その他は、それまで在学した学校は小学校、中学校が分かれていた。それが一緒になって4月から子どもの側に戸惑いなかったのか。それともう1つは、4月からやってみて子どもたちにどういう変化が出てきたと感じているのか伺いたい。

■戸井学園佐々木校長

この戸井地区ですが、日新小中側と潮光・戸井西側というのがありましたが、もともと学校行事など大きな行事では一緒でした。例えば修学旅行に行ったり遠足に行ったりなど、同じ学年同士は割と共通の学習内容でやっていたものですから、一緒になったときに初めて会うというケースはそんなになかったみたいです。

■工藤市長

なるほど、地域性ですね。

■戸井学園佐々木校長

そうですね。ただ斜めのちょっと上とか下の学年になると、校区が違ふとちょっと分からなくなってしまうところが、新しい出会いで、今回、人間関係がさらに膨らんでいい形になっているのではないかと思います。保護者の願いは、少ない児童生徒の数であれば、学習面でも生活面でも、例えば部活動一つとっても、なかなか子どもたちの教育活動の幅が広がらないということで、それで戸井地区については、保護者、幼稚園、小学校、中学校のPTA会長の皆様様が早期の統合を要望して、このような形になったとお聞きしておりますので、とにかくまず、母集団がちゃんと増えることによって教育活動の幅がより広がるということを皆さんが願っていました。それをきくと子どもたちも感じていて、今回、5人だったり10人だったりする学級を超えた教育活動が彼らの学校生活を少し、今までに比べると豊かなものにしていただいていると思いますし、子どもたちも統合したことについては非常に前向きな感想を持っています。

■工藤市長

そういう意味では非常に地域性が強く、愛着も強いので、こういうやり方が合っていたと

思います。例えば私のところはすぐ近く北美原小学校があり、通っている子どもは、美原という地区に対する愛着が育つかというと、函館という広い区域になってしまうことが考えられる。ここだとやはり戸井という地域性が子どもにも親にもきつとある。そういう意味では非常に団結しやすいし、結束しやすいと思います。

■戸井学園佐々木校長

そうですね。

■工藤市長

それで、先ほど、各委員からもお話がありましたが、ステージが4-3-2、文化祭や学芸会が一緒、あるいは運動会は一緒ですが、部活動はどのようになっているのでしょうか。

■戸井学園佐々木校長

部活動は少ない数しかないのですが、今一番多いのがバドミントン部です。9年生は引退し現在は7・8年生が活動しており、その中に5・6年生も部員として入っております。5・6年生は週に2回だけ一緒に活動して良いとしております。ただし、大会とかは今は出ないで、あくまでも7・8年生になって本格的な中学校側の中体連などに向かう準備期間ということで、放課後の有効な使い方を保障してあげるという意味で活動しています。練習内容は同じです。

■工藤市長

他の学校だと、中体連とかは中学校の1年から3年の中から選手を選抜してチームとしていくわけですが、ここは、8年生、9年生でしか出ない、例えば中体連とかはどうなっていますか。

■戸井学園佐々木校長

7年生、8年生、9年生が出ます。

■工藤市長

それは、他の学校と同じですね。

■戸井学園佐々木校長

同じです。

■工藤市長

年齢で決めているということですか。

■戸井学園佐々木校長

はい。申し込み用紙は、やはり中1、中2、中3というところに、私たちの7・8・9年生を読みかえて入れていくという形です。

■工藤市長

先ほど校則の話もありましたが、小学校だとあまり校則という意識がなかったけれども、中学校に行くと制約がでてくる。児童会や生徒会も、他だと小学校6年生が大抵会長やっている、あるいは中学校3年生がやっているが、戸井学園は、9年生がやっているのでですか。

■戸井学園佐々木校長

そうです。8年生の後期に生徒会長が最終学年と決まっています。9年生は、秋にもう後輩に後を譲って引退するという形です。

■工藤市長

受験勉強があるからですか。

■戸井学園佐々木校長

そうです。そして8年生がトップになって、4年生から児童生徒会活動に参加するという形になります。ですので、6年生は卒業証書をもらいません。

■工藤市長

そうですね。

■戸井学園佐々木校長

小学校の卒業にならないわけですから。これから歴史を積み重ねていかないといけないと

考えています。

■工藤市長

そうですね。もしかしたら、小学校を卒業していないのかと言われてしまうこともあるのかな。

■戸井学園佐々木校長

子どもたちは返答に困るのかもしれないです。うちは義務教育学校ですので、きちんと答えられるようにしていかなければと思います。

■工藤市長

学校に関して、最近、旭川の例がある。いじめの問題、自殺の問題など、中学生になれば思春期もあり、様々な問題が生じる。1年から9年まで揃うことによって、このいじめの問題も、良い方向に展開する可能性がありますか。それとも、とりわけそういうことはないですか。

■戸井学園佐々木校長

今、工藤市長がおっしゃったように、道内でもいろいろな重大事態が起こっておりますし、全国的にも非常に悲しいニュースが入ってくる昨今ですが、今まで、函館市教委ではいじめはとにかく認知して、いじめ見逃しゼロということでキャンペーンを張って進めてくださっていて、私たちも同じ取組を学校で行っております。本校については、いじめを撲滅、なしにする集会ではなく、今回は戸井学園ハートフルキャンペーンというのを行っています。要は子どもたちがよさを認めあう、その土壌を作っていくということを、11月から始めています。普段から、旭川も含めて、そういうことはもう他人事ではないということで、研修も進めています。小さい芽が生まれたときに初動を間違えると、うちのような学校でも、本当に分からないという危機感を持っておりますので、とにかく人間関係のトラブルを自分たちでしっかり整理していく力も必要ですけど、やはり弱い側の立場にしっかりと立って、私たち教員の目と、保護者との連携で、きっちりストップさせていきたいと思っています。

■工藤市長

そういう意味では、函館市内の他の学校に比べると、子ども同士の密着度が非常に高いと感じる。

スクールバスでも、みんなに乗って帰っている状況です。3分の2ぐらいがスクールバスを利用していることになると思う。スクールバスでの下校は、ステージごとに別なのか、朝は一緒なのですか。

■戸井学園佐々木校長

朝は一緒です。日によっては、1年生だけ5時間で終わるという日もあります。そうすると、1年生のほんの数人だけが5時間で終わったバスに乗って、行って帰ってきて、次は6時間目終わって部活のない子が乗って、また行って帰ってきているということです。

■工藤市長

3回くらい行き帰りをしているということですか。

■戸井学園佐々木校長

そうです。大変助かっております。

■工藤市長

最後に、戸井学園のような雰囲気というのは、何回も言っていますが、地域性というか、そういう面もあるのかと思います。先ほど市内の各学校においても小中の交流など、具体的な取組がいろいろ進んでると聞きました。戸倉中学校区だとか、あるいは五稜郭中学校区だとか北中学校区といった地域が小中の連携が進んでいると聞きましたが、その目指す姿は原型であって、最終的に地域ごとに、こういう義務教育学校というか、小中一貫校にしていくような時代を目指してるのか、それとも、あくまでもここは原型を目指しているのですか。

■永澤学校教育部長

今の時点では、小中一貫とコミュニティ・スクールを一体的に進めるということを目指していて、ただ、通学区域だとか、1つの小学校から1つの中学校への進学という地域もありますけれど、小学校が2つ、中学校が1つで、この小学校2つがそのまま同じ中学校へ行くという校区もあれば、この小学校が別な中学校に行くという校区などいろいろありますので、今はまだすべての学校を義務教育学校にするというよりは、できるだけの中1ギャップをなくしたり、あるいはコミュニティ・スクールも一体的に進めながら、地域の力を活用して、子どもたちを見守ったりするなど、教育活動を充実させていく方向で考えています。

■工藤市長

では、まだ文科省自体もそういうことを示していない、将来の形を全国的に統一していくのではなくて、連携で小学校と中学校までやっているところと戸井学園のように一体でやっているところなど、バラバラということでしょうか。

■永澤部長

そうです。

■工藤市長

わかりました。他にありませんか。

■須田委員

義務教育学校とは違う話ですけれども、今、GIGAスクール構想ということで進めています。先日もICTを活用した授業が盛んな学校を見学させていただきましたが、本校においてICTの定着度と今後に対しての課題みたいなものを、教えていただきたい。我々もコロナで、現場の声を聞く機会が少なくなっているものですから、教えていただきたい。

■戸井学園佐々木校長

今は全国的に、このGIGAスクール構想によって、一人一台の端末を入れていただいて、函館市はクロームブックという端末を入れてくださってますけれども、先ほど見ていただいたとおり、子どもたち、若いので、ちょっと触り始めると、ちょっと指導するだけで、どんどん、どんどん私たちと違って身に着けていく力を持っています。効果としては、今まで、例えば書くのが苦手だった子が打ち込むことはできたりしています。それから、来年、市教委でも重点としている不登校対応についても、持ち帰って、学級と家庭をつなぐこともこれからできると思っております。この前、校長同士で話したことは、例えば、別室にしか登校できないような子と教室を結ぶということも、端末でできるなど、いろいろな活用方法があるかなと思います。また、教科の方でもクロームブックには、Googleのいろいろな教育のアプリケーションが入ってるものですから、なかなか発言できない子の意見をばっと拾ってあげたり、宿題を出してあげたりなど、いろいろな使い方ができると思います。今は発展途上で、本校はICTの得意な教員がいるのと、サポーターの方がしっかりと来てくださってサポートしてくださっているというのがありまして、ずいぶん進んでいるのではないかなと思っております。低学年の子どもたちも臆することなく、PCのスキルを身につけていってるとないうふうに思っています。あとは個人的には、どうしてもパソコン上でのコミュニケーションによる授業になったりするところがあるものですから、そこは本当に対面で、しっかりと自分の考えを伝える力など、そういうものとのバランスをしっかりとっていかなければならないというふうには思っていますが、今はまず、しっかりと端末を使いこなせる力をつけてあげて、そして、対面で自分の人間性を出しながらコミュニケーションできる力と両立する力をつけてあげていければいいと思います。

■須田委員

子どもに対しては、指導すれば、今の子どもたちは進んでいくと思いますが、先生方の技術的な差異みたいなものはどうでしょうか。

■戸井学園佐々木校長

PCを使うスキルについては、教員間で非常にばらつきがあるのが現実なものですから、例えば、こちらが黙っていると使わない人はずっと使わないで、そして得意な人はどんどん進

んでいくという危惧がありました。それで学校間でうちの学校はとか、下手をすると兄弟間で、うちの担任はとかということも心配されるということを私たちの方で共有しています。それで、各学校でしっかりと研修を行ってございまして、それから教育委員会の方でも研修の機会をたくさん作ってございまして、参加させてもらっていますし、本校でも、グループに分かれて使い方を学ぶという研修をしております。各学校、今、かなり急ピッチで進めておりますので、年度終わりには、随分進んでいるのではないかなと思います。

■工藤市長

はい。よろしいでしょうか。それでは、今日、戸井にお住いの函館市議会の吉田議員がいらしてしますので、感想やご意見があればどうぞ。

■吉田議員

おかげさまで、先生も優秀な先生ばかりです。地域の活動もコロナで遅れておりますが、大変うまくいっておりますので、私が口を出すことはございません。

■工藤市長

その他で何かありますか。それではないようでありますので、今日の教育会議を終了いたします。戸井学園佐々木校長先生、平石教頭先生、池田教頭先生ありがとうございました。

■横川教育政策推進室長

以上で本日の協議事項は、すべて終了いたしました。

これもちまして、令和3年度函館市総合教育会議を閉会いたします。

本日の会議の開催にあたりまして、ご協力いただきました戸井学園校長の佐々木様をはじめ、職員の皆様に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。